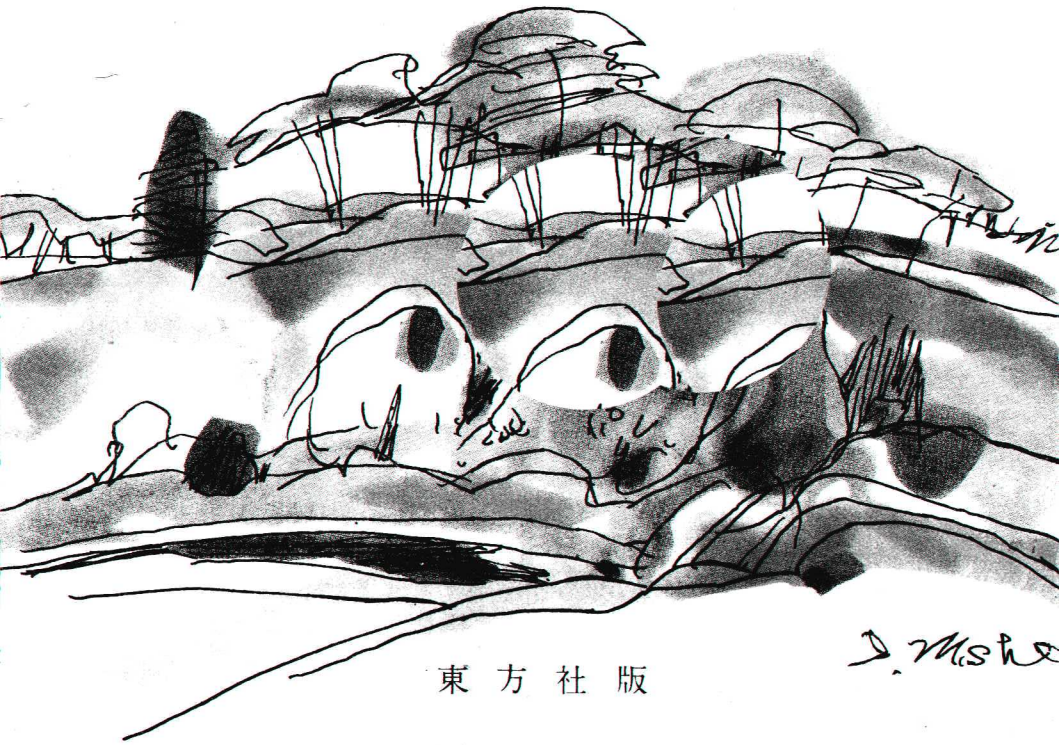
暁の合唱

石坂洋次郎

家庭小説選書



東方社版

暁の合唱

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和四十年三月五日発行

定価五二〇円

著作者　石坂洋次郎
発行者　石渡磨須子
製版者　内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地
発行所　東方社
振替東京五七七七四番
電話大塚(941)一八七三番
七〇三六番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1965 Tohosya Printed in Japan

長篇小説

暁の合唱

石坂洋次郎

長篇

暁の合唱

指　5
友情　22
家族　38
傷心　52
彼女達　60
生活へ　88
月夜　102
殴る　118
腕相撲　131
夏　143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アカシヤの蔭に　170
勤務日誌　その一　184
勤務日誌　その二　196
勤務日誌　その三　209
野火　222
見舞客　239
人形　260
回復して　275
秋雨　290
終曲　318

装幀　御正伸

指

1

二時間目の終業のサイレンが鳴つた。

受験生達は、逆上せた赤い顔をしながら、ゾロゾロと控所に引きあげて来た。そして、同じ女学校から来ている仲間同士は、三々五々、あちこちに塊をなして、いま了えたばかりの地理の考査の出来工合について、ヒソヒソと熱心に語り合いをはじめた。

「ざんねん！」と、口惜しがつて地団駄踏む子もあれば、「よかつた！」と、飛び上つて胸をさする子もあり、隅の方で、友達に肩を撫でられながらシクシクと泣き崩れている子もある。そうかと思うと、済んだことは綺麗さつぱりと諦めてしまい、羽目板に凭りかかつて、次の作文の時間に備えて、参考書をペラペラ繰つている、最後の五分間主義の子も所々に見えた。

そうした中に混つて、ただ一人、ひどく風変りな真似をしている子が目についた。控所の突き当りに取りつけてある肋木に攀じ登つて、高い所からのんきそうに場内を眺め渡すかと思うと、次には横木にぶら下がつて、顔中真赤にして力みながら、身体を吊り上げたり、吊り下したり、それを何べんも繰返して刀が尽き果てると、ドシンと床に跳ね下りて、「ハハハ……」と笑い出し、またぞろ肋木に匍い登つていく。何処の国に試験がありますか、といつた風だ。

背丈の達者な子で、髪は縮れ気味だが、刻みの荒いハッキリした顔立で、殊に目の光に艶があり皮膚は雪灼で見事に浅黒く染まつている。所謂、女の子らしい可憐な趣には乏しいかも知れないが、人間一匹としては、そのよく発育した図体だけでも、一寸頼もしげな感じがする子だつた。

何べん目かに、また肋木に攀じ登つた所へ、友達らしい、色白な優しい顔立の子が駆け寄つて来て、

「朋子さん、貴女何しているのよ。ほかの人が変に思うじやありませんか。よしなさいよ」
「私？　運動不足で血の循環が悪くなつたから、いまそれを癒している所だわ。……私何べん上れるかしら？　秀子さん数えてね、一へん、二へん……」
朋子は、茹でたように赤い顔をして、下眼を使つて秀子に笑いかけ、好ましげな重量に満ちた身体を、両腕に託して、ゆつくり上下させた。
「よしなさいよ。貴女一人だけが試験がよく出来て、浮かれてるみたいじやありませんか。ほかの人に悪いわ……」
「あら、有難う。だけど、どうして私一人だけが試験をしくじつて棄鉢になつてるみたいに見えないのかしら、……ああもう駄目。腕が抜ける。落ちそうだ。危い！」
そう叫ぶのと一緒に、大きな図体がドシンと飛び下りて、いきなり秀子の両肩に抱きついて来た。弾みを喰つて、二人一緒に二三歩よろめき、秀子だけは御丁寧に尻餅をついてしまつた。
「ひどいわ、ひどいわ」
「ごめんごめん、私貴女がもつと力があるかと思つたのよ、ハハハ……」
「憎らしい、あんなことを言つてる。……お尻が痛かつたわ」
「そう。私はまた床板の方が折れやしなかつたかと思つて……」
「まあ！　この人どうかしてるわ。知らないから……」
秀子は憤慨してほかの友達等のいる所に立ち去つた。後から朋子の甲高い笑声が追いかけて来た。
今日はS女子師範学校の第二部生入学考査の第二日目だつた。毎年一月下旬に施行されるこの考査には、未来の女ペスタロッチーを夢みる県内女学校の才媛揃いが、頬を林檎色に紅潮させて、続々と詰めかけて来るのだつたが、昨日と今日の学科試験の成績で、ほぼ及落が決定するものとみて宜しく、それだけに受験生達の気分も今日が最高潮に達しているわけだ。朝から、国語、地理と済んで、剰す所は作文一科だけ——。
サイレンが、脅かすような唸き声をあげて、長く長く鳴り響いた。泣いても笑つても愈々これ一時間だ。

控所の騒ぎは急速にしずまり、受験生達は、とどろく胸を抑えて、細長い廊下を粛々と最後の試験場に向つた。菅井秀子もその一人だつた。と、ふいに、背後から、秀子の耳許に、温かい気配のものが迫り、

「怒つた？　ごめんなさいね。私いまとても苦しいことがあるの。後でお話しするわ」

そう囁いて、前の人込みの中に紛れていく斎村朋子の豊かな後肩が見えた。秀子が返事をする間もなかつた。

2

――課題「我が希望」文体随意、六百字以内――

校舎全体が深い谷間のようにしんと静まりかえつていた。室の中は、その大きな静寂の中に穿たれた一つのポケットのように、小じんまりとしていて、ストーブの燃える音や、鉛筆を走らす音や、ホッという吐息の音などが、泡沫のように絶えず浮き沈みしていた。もう時間は七八分も経過している。

その間、朋子は膝の上に手を組んで、想を練るかのように、目の前の空間をぼんやりみつめていた。ふと、窓の外に目をやると、いつ降り出したのか、白い小虫の群のような粉雪が音もなく舞い狂つている。白い、白い、無数の斑点からなる意味のない風景――。監督の教師も退屈そうにそれを眺めている。

彼女はゾクンゾクンと続けざま二度慄えた。と、いままで身体の中に張りつめていた、或る力の均整が急にほぐれて眼の縁が生熱く霑うて来たかと思うと、大玉のきれいな涙が、紺地のスカートに、点々と五つ六つの斑点をつくつた。――朋子は、鉛筆をとつて、追われるように烈しい勢いで書き出した。

「我が希望。それは言うまでもなく、今度の入学考査を無事にパスしたいことだつた。昨日まで、いや第二時限の地理の考査が終るまでも、その希望に取り憑かれていた私だつた。しかし、私はいま、十分前までの私の希望を放棄する決心の下に、この作文を書き出さねばならなくなつたのだ。

先生、（これを読まれる先生がどなたであるかも分らないのに、そう言つてお呼びかけしないではいられ

ないほど、いまの私は、乱れた気持で筆をとつているのです）私には、最初から、この学校に受験する資格がなかつたのです。私の左手の薬指は、小さい時分に怪我をして、関節の屈伸が不能なのです。そして、私は、去年ここに入つた先輩の方から、入学考査の時の身体検査は非常に厳重で、試験官の前に両手を揃えて十本の指の開閉屈伸を試され、それが不完全だつたら、学科試験がどんなによく出来ても、弾かれてしまう、ということを聞かされて居りました。初めから駄目なことが分りつつ、何故それでは受験する気になつたのか、それは過去からひきつづいて来ている一つの勢いに捲きこまれてしまつたから……。その勢いというものを分析してみると、負け嫌いもあろう、狡さもあろう、弱さもあろう。ともかく私は女学校にいる間、どんな親しい友達にも、自分の指の働きが十分でないことを覚られずに過して来た。そうするために、私は、授業中も休み時間中も学校の往復途中も、どんなに絶えず神経を使わねばならなかつたことか。

それ程醜いという訳でもない薬指の怪我を、こんなにまでして他人からひた隠そうと努めて来たのは、自分の肉体というものに限りない愛着をもつていたことが一番大きな原因であろう。私は世間並な女の美しさを欲しない。白粉も口紅も派手な着物もそれ程欲しいとは思わぬ。だけど肉体だけは、みえる部分もみえない部分も、足の爪先まで完全な姿態と健康を保持していたい。私の肉体が、浅黒い、すこやかな美しさを失わぬ限り、私はまた善良で心の温かい女でもあり得るのだ。正しい判断も思いやりも異性に対する恋愛も（最後のことは未経験、将来も当分興味なし、先生信じて下さい）、私の場合は、みな、深い谷間から霧が湧くように、私の肉体の深奥部から湧き出して来るのだ。私は私の肉体のみを信頼する……。

そんな風で、私は今日まで五体に少しも欠陥の無い人間として、周囲や自分自身を欺き通して来た。母校の先生から本校への入学をすすめられた時も、かねて独立した生活を欲していた私は、今度もいままで通り何とかごまかせるつもりで、よく考えもせず、軽率にそれに応じてしまつたのだつた。身体検査になつたら……、これまで誰にも見せたことの無い特別に可愛い笑顔をつくつてみせて、試験官の目をくらましてやりましよう（卑しいことを書いてごめんなさい）……そんな惨めなことまで考えていたらしい私だつた。

皮肉なことに、昨日も今日も、学科試験は意外によく出来た。だが、最後のこの時間になつて、今までも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちこたえて来た哀しいイツワリを、私自身がもはや支えきれなくなつたということは、何という皮肉なことであろう。

私がこんな暴露的な文章を書いている心の底には、あわよくば、先生方の同情をひいて、特別に入学を許可してもらおうとする卑しい気持が動いていない訳でもない。けれども、それは、健康な肉体の私が、最も侮辱する私自身の醜い影にすぎないのだ。

ああ、外には白い吹雪が荒れている。私の大好きな白い美しい氾濫する眺め！　そうだ、私は今からこの見知らぬ大きな街を、吹雪に打たれながら当途もなく迷い歩いて、その間に明日の我が身の振方を決めることにしよう。私は健康であり、それ故に美しくもある。私の前には、広い、ゆるやかな生活の川が流れている。……これを読まれる先生、どうか私の正しい幸福な未来を祈つて下さいませ、さようなら……。

3

（なんだつてあんな作文を書いてしまつたのかしらん……）

朋子は、何度目かの同じ後悔を、また犇と身に感じた。

学校側で調査し、学校側で処置するまでは、私として出過ぎたことをするべきではなかつたのだ。去年まではどうあろうと、今年は身体検査の方針が変つて、指一本の屈伸不能ぐらい大目にみてやつてパスさせることになつていたのかも知れないのに……。それに何と言つても、私があんな文章を書いた動機には、入学するしないは別として、先生方に哀れつぽく訴えかけて、自分というものを大きくクローズ・アップして認めさせようという下心が働いていたことは確かだ。私は……何故だか素直でない娘なのだ……。

朋子は、その時、街の中を流れる大きな黒い河に沿うて、当もなくのろのろと歩いていた。帽子が無い頭には真白に雪をかぶり、わざと襟をはだけた外套のポケットに両手を深くさしこんで、ゴムの長靴をボタボタ曳きずりながら行く。時々足を停めては、のんきそうに周囲を眺めまわしたり、金魚のように口をパクリと開けて、顔に群がり寄つて来る雪片を吸いこんだりした。――吹雪はよほど温やかになつた。

ある橋の袂の所で、焼芋屋の櫓が蒸気の笛を鳴らしていた。彼女は急に眠つていた食慾を誘われて、熱い焼芋を一袋買つた。それを食べる場所を物色しながら行くと、道路の右手に、神社の境内らしい静かな広い一劃がみつかつた。鳥居をくぐつて中に入り、狛犬の台石の雪を払つて腰を下し、袋の中から、胡麻塩で味をつけたホヤホヤの焼芋を一つとり出して、ワングリと一口頬張つた。そして思わず首を縮めてクスンと笑を洩らした。だが、食物の甘味が舌に溶け出すと、彼女は急に真面目くさつた表情をして、白い丈夫そうな歯並を覗かせ、豊かな顎を十分に動かして、次々に焼芋の切身を平げはじめた。嚙んだり、嚥み下したり、問えたり、舌をなめずつたり、忙しく賑やかだつた。時々袋の中を残り惜しそうに覗いてみたりした。

お腹がくちくなると、頭の中が妙にぼんやりして、先刻来のいらいらした考え事が、厚いガラスを隔てて覗くように、うすくぼやけた、どうでもいいものに思われて来た。

(なんとかなるんだわ、身体が達者で正直に真面目に働きさえすれば……)

彼女は立ち上つて拝殿の前に進み、軒から垂れ下がつている太い綱を力まかせにゆすぶつて、ジャランポランと鈴を鳴らした。それから柏手を高らかに打つて礼拝した。何を祈るともない、爽やかな、ポカンとした気持だつた。

縁に上つて、拝殿の周囲をめぐり、何気なく欄間の絵馬札を見上げた朋子は、

「あら!」と呟いてひとりで顔を赤くした。

どの絵馬も、丸髷を結つた中年の女が、着物の前をはだけて大きな白いお腹をつき出し、それを取上婆さんが傍から揉んでやつている、稚拙な胡粉画が描かれてあつた。

(——安産の神様だつたんだわ。私じや少うし早すぎた……、だけど何時かは私だつて、家の中が幼稚園みたいになるほど生むかも知れないんだから……、子供つて、可愛いものなんだわ、きつと……)

朋子は、少し現金かなと思つたが、お賽銭を上げてもう一ぺん丁寧に拝み直し、口のまわりに謎めいた微笑を漂わせながら、肩を丸く盛り上らせて、再び街に出て行つた。

河は、つぎつぎと際限もなく舞い落ちて来る白い雪片の群を、睫が動くように音もなく吸いこみながら、ゆるやかに、くろぐろと流れていた。何処から来て何処まで行こうとする水なのであろう。——それを眺めていると、朋子の心は、けだるいような、不思議に和やかな世界に深くひきこまれていくのだつた。

試験のことは綺麗さつぱりと諦めたし、美味しい焼芋を存分に平げたし、安産の神様を拝んだし、あとは先生に代る将来の仕事さえみつかれば……、と軽い棄鉢もまじつた気分を、半端な口笛にして唇の先にスウスウ通わせながら、橋や街角の建物を目あてに、今来た道をのろのろと引返していく。

やがて大通に出た。軒並に、店の中を珍しそうに覗き込みながら歩いていると、ふと、ある二階建洋館の前に出ている立看板に目を牽かれた。

「自動車運転手募集、年齢三十歳マデ」と筆太に記された傍に、やや細字で、

「女車掌、女事務員募集、高小乃至高女卒程度、小出自動車部」

朋子は外套のポケットから両手をぬき出し、立看板の前にまつすぐに立つて、三四回傍書の文句を熱心に読み下した。それから、背後の建物を、屋根から入口まで、人間を観るようにジロジロと観察した。それは少し古びているが、ガッシリした落ちつきのある建物だつた。

彼女は、一寸の間、小首をかしげて考えこんでいたが、やがて決然とした風で、外套を脱ぎ、頭を少し屈めて、掌で髪の上に溜つた雪を二三度強くこすり落した。滴がしたたかに絞れて、グショ濡れになつた掌を、熱い頬ぺたにこすりつけてじかに乾かしてから、しつかりした手つきで、入口の戸を押した。

（あつ——）

朋子は思わず口の中で叫んで、一瞬そこに立ち竦んだ。というのはすぐ目の前に、二人の人物が、自分が入つて来るのを前以て承知していたかのような様子で、じつとこちらを見つめていたからだつた。

一人は、髪を櫛巻にした細面の色白な若い女で、コンクリートの床の一部を仕切つた畳敷の帳場に坐つて、

長煙管で煙草をふかしていたが、昔の錦絵からでも抜け出たようなみずみずしい人だつた。こんな綺麗な人つて世の中にあるのかしら……と、朋子はびつくりしてしまつた。いま一人は、土間の曲木椅子に馬乗りにかけて、指先で顎を撫でている青年だつたが、髪をまん中から分けたのがよく似合い、明るい苦み走つた顔の、これもすぐれた美男子だつた。——朋子は八分方のぼせてしまつた。

「貴女、何か御用なの？」

櫛巻の女がニコニコ笑いながら尋ねてくれた。

「はい、あの、前の立看板を見て、私でも使つていただけるかしらと思つて伺いました」

答えている間に、急にストーブの火気に当つたので、髪の滴が、筋を曳いて顔中に流れ出し、額の生え際からは湯気がホカホカと上りはじめた。朋子は泣き出したくなつた。

「おや、そうでしたか。それでは……、まあさきに頭をお拭きなさい。なんにも被らないで歩いていたのね」

櫛巻の女は、ストーブの上に張り渡した干物用の針金から、乾いたタオルをとつてくれた。

「ええ、有難うございます」

タオルは受けとつたが、外套の置き場に迷つていると、背広服の美青年が、横合から、

「こつちに寄越し給え、乾かして上げるから」と、外套をひつたくつて、ストーブの椅子の上にひろげかけた。

「済みません」

「なあに、僕は女の人に親切にして上げたい性分でね」

「——」

朋子は困つてしまい、赤くなつて俯向いていた。

5

「そこへおかけなさい」
「はい」
朋子は度胸を据えて、櫛巻の女が示した椅子に、深く腰を下した。
「学校はどちらですか」
「Kの女学校です」
「どうして今頃こつちに来ているんですか」
「はい師範の二部の試験を受けに来ているのです」
「ああ……それじや試験がしくじつたんで、ほかの仕事をしようという気になつたんですね」
「いいえ、試験は明日も一日ありますが、今までの所は自分としては割によく出来たと思つて居ります。ですけど、私急に考えが変つて、学校に入るの止めようと思つたものですから……」
「どうして？」
「家があまり豊かでないのに、この上一年も二年も学資を出してもらうのは気の毒ですから……」
「そりやあ貴女ちがいますよ。親というものは、子供を立派にしたいために苦労するのが何よりの張合いなんですからね。いま貴女が途中で勝手に方針を変えたりしたら、親御さん達がどんなにガッカリするか知れないわ」
「ええ、……それにはもう一つ別な訳もあるんですけど……今度お話しますわ」
朋子ははじめて白い歯を覗かせて微笑んだ。人を牽(ひ)きつける明るい笑顔だつた。櫛巻の女も曳きこまれて何となく笑い出し、——
「お父さんの御仕事は？」
「馬を仲買いする……馬喰です」
「——お父さんは貴女がこんなとこで働くのを承知なんですか」
「いいえ、でも私が話をすれば反対はしません。父は私を信用して居りますから……」

そこまで——、何でもない問答だが、舞台で台詞の受け渡しをしているような、隙の無い呼吸が通つていた。それを感じている櫛巻の女は、一寸小癪に触つた風で、しかし十分に好意のこもつた眼差で、改めて朋子のよく発育した身体を隅々まで眺めまわした。朋子は自然に肩先をすぼめた。

「それではもう少しお尋ねしますが、貴女はどんな方面のことがお得意ですか?」

これは難問だつた。朋子は当惑して、自分の方から答を求めるように、眼を大きく見開いて、何べんも美しい女主人の顔を見上げてモジモジしていたが、段々逼迫して来る呼吸づかいを一ぺんに吐き出すような勢いで、

「あの、身体が丈夫で……そして、よく食べることだと思います」

「へえ——」

女主人は、一杯喰つた形で、しばらく呆気にとられていた。例の美青年は、椅子ごと身体をゆすぶつて笑いを爆発させ、それが止むと、立ち上つて帳場の隅の戸棚から、到来物らしい菓子箱をひき出して、朋子の前に在つた小さな椅子の上に、わざとガシャンと音がするように載せた。中には艶のいい栗饅頭が一杯、見事な坊主頭を並べていた。

(なんて意地悪な真似をするのだろう)

朋子は、泣かんばかりに赤くなつて、じつと唇を噛みしめていた。美しい櫛巻の女は、我慢がならない様子で、クスリクスリ笑を洩らしながら、

「でも、そりやあ結構なことですわねえ。人間は身体が達者で食がすすむほど有難いことはありませんからね。……さあ、お好きだつたらお上りなさい。……それから、貴女は車掌の方でなく事務員の方が希望なんでしようね」

「——私、運転手になれないかしらと思うんですけど……」

「あらあら、この人は、まあ!」

女主人は、興ざめたように眉をよせて、この女学生はとんだすれつからしではないのかしらん、ともう一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com